

言語習得の3要素を促す教科横断型授業の実践

—主体的・対話的で深い学びの実現のために—

土屋 進一

はじめに

これまで筆者は、意味のあるコンテキストの中で、他教科と協働しながら、言語形式と意味を同時に学べるような手法を模索し、教科横断型授業という形で授業実践を試みてきた。具体的には、生物、物理、数学、古文、日本史、世界史、家庭科との協働で実践したが、各授業後の生徒のフィードバックから生徒の興味・関心の喚起や「主体的・対話的で深い学び」に関して確かな手応えを感じた。

本稿では、和泉(2016)の言語習得の3要素の枠組みに基づき、これまで実践した教科横断型授業の中から、①古文×英語、②物理×英語、③数学×英語の指導例を整理し、今後の英語教育のあり方について論じてみたい。

1. 言語習得の3要素

和泉(2016)では、言語習得やコミュニケーション能力の育成に関して、①言語形式(form)、②意味内容(meaning)、③言語機能(function)を重要な3要素として挙げている(図1)。この3要素を授業の中に効率良く取り込むために、①言語形式を英語教師、②意味内容を理科や社会などの他教科の教師、③言語機能を英語教師+他教科の教師で展開すれば、学習者にとって、これら3要素がバランス良く結びついた授業が可能となろう。

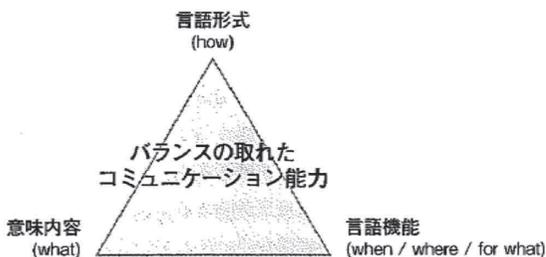


図1 フォーカス・オン・フォームの目指す英語教育
(出典：和泉 2016)

2. 3要素の関係性と具体例

言語形式(form)・意味内容(meaning)・言語機能(function)とコンテキストの重要性の理解をより深めるため、和泉(2016)の具体例を1つ挙げたい。

読者は、“Do you have any money?”の単文の意味を考えると、どのようなコンテキストを思い浮かべるだろうか。言語形式のみに焦点を当てた授業を行うと、「これは一般動詞の疑問文で、Doを文頭に持ってきて作り、Yes, I do. や No, I don't. で答えることができる。」のような説明をすることになるだろう。しかし、言語機能に焦点を当て、次の3つの場面を提示した場合はどのようになるだろうか。

場面1 *While you are walking in a dark street at night, somebody in a dark outfit approaches and asks you:*

Man: Do you have any money?

You: _____

場面2 *A mother is talking to her teenage daughter who is about to go out. She asks her.:*

Man: Do you have any money?

You: _____

場面3 *You file a report to the police about getting robbed. After completing the report, when you are about to leave, the police officer asks you:*

Man: Do you have any money?

You: _____

言語形式のみに焦点を当てれば、“Yes, I do.”や“No, I don't.”で答えることができる。しかし場面1では、夜中に黒い服の男が近づいてくる状況を考えれば、“Do you have any money?”は“Give me your money.”の意味で解釈でき、YesやNoと答

える前にその場から立ち去るのが普通であろう。場面2は、母親が娘の出かけに言う“Do you have any money?”である。これは、“Do you want me to give you some money?”のような気遣いと捉えることができ、“Thank you. But I am OK, mom.”のような答えを想定できるであろう。場面3は、被害者が強盗事件を警察に通報し、事情聴取を終えた後、警察官から“Do you have any money?”と言われた状況である。ここでは、「家に帰るだけのお金は持っていますか」、つまり“Can you get home?”の意味と解釈できよう。その返答としては、“I'm OK. I can walk home.”などが考えられる。

このように、同じ言語形式である“Do you have any money?”が、異なる言語機能を与えることによって、意味内容がさまざまに変化するのである。このことを念頭に置き、我々英語教師は、授業を行うことを改めて考えなければならないだろう。

3. 教科横断型授業における3要素の具体例

ここでは、先に述べた言語習得の3要素の枠組みに沿って、これまで教科横断型授業の実践の中で3要素のバランスを取りながらも各要素の特徴を引き出す具体的な指導について論じてみたい。

①言語形式(form)

言語形式(form)にフォーカスした授業が展開できたのは、古文×英語の授業であった(土屋, 2018)。英語の「仮定法」と古典の「反実仮想」を比較することで、共通点・相違点を知り、英語と日本語における「仮のものを想定する」際の思考の違いを捉えることを目標とした。図2に示すように、英語教師と国語教師から英語と古文の例文(英語: If I were a bird, I would fly. 古文: 鳥ならましかば、飛ばまし)を提示し、生徒がグループで、言語間の共通点や相違点についてディスカッションを行いながら言語形式(form)に焦点を当てた授業を行った。

英語	If	I	were	a	bird,	I	would	fly.
日本語								
古文								

図2 (ワークシートの一部)

このように、古文文法と英文法の文法構造の学習に、2つのチャンネルを与えることで、学習者の気づ

き(noticing)を促進する効果があったと言える。さらに、現代日本語と古語との比較もでき、生徒は深い学びを得ていたようだ。

②意味内容(meaning)

意味内容(meaning)に焦点を当てた実践例として挙げられるのは、物理との教科横断型授業である。この授業では、日常生活においてよく用いられる速さ(speed)と速度(velocity)の違いについて物理の公式の意味内容に焦点を当て、それぞれのことばの持つ意味を深掘りした。“speed”と“velocity”はどちらも「速さ」に関係する英単語であるが、“speed”が、物理で「時速60キロメートル・秒速50メートルなどの速さだけを示すスカラー量」を意味するのに対し、“velocity”は、「西に向かって時速50キロメートル・上方向に分速500メートルで上昇」のように、方向と速さを合わせたベクトル量を意味しているという違いがある。この違いについて、物理の教員から公式を用いながら説明してもらい、それぞれの単語の持つ意味を物理学の観点から考察した。このことは、今井(2020)で認知科学と言語習得の観点から、多くのスキーマをもち、単語を点ではなく、面で捉え、それらを統合的に学習していく必要があるとしており、このような授業が有効であるということを示唆している。

③言語機能(function)

数学の分野における「集合」のことを英語で“set”と言う。この集合を表現する時に用いられるsetを英語で表現する際、数学の集合の概念と英語の集合名詞の考え方と共通点があるのではないかと考え、言語機能(function)に焦点を当て、授業を行った。

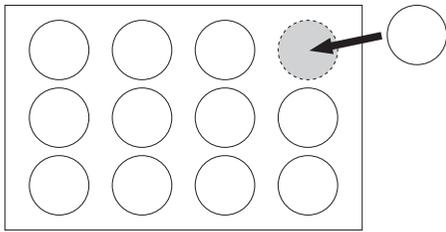
例えば、setを使った英語表現を教える際に、レストランでの場面(function)を想定し、次のような表現を考えた。

Q. Which expression is suitable when a waitress asks you whether you have got what you ordered at a restaurant?

- ① Are you ready to order?
- ② Are you all set?

答えは②である。① Are you ready to order? のreadyは、「心の準備ができた」という意味なの

で、客がこれから注文をする際に店員が客に対して言う表現である。一方、② **Are you all set?** は、「ご注文の品は、以上でよろしいでしょうか?」という意味になり、注文してから料理がすべてそろっているかを店員が客に対して確認する場面で用いられる。このときの **set** の用いられ方は、数学の集合の考え方を応用すれば、図3のように、1つ1つの注文した料理が注文の品という1つのグループの集合の中に収まるイメージで説明するとより深い理解が得られるのではないだろうか。



(図3)

さらに、数学教師と一緒に次のような教室内の笑いを誘うユーモア溢れる **Role-play** を行った。

数学教師：You know, I'm thinking of proposing. I've got the ring.

英語教師：Are you all **set**?

数学教師：Of course! All I have to do is find someone to propose to.

4. 生徒の反応から得たもの

ここでは、これまで多くの教科・科目と連携し、教科横断型授業を実践してきた中で筆者が感じたことを2点述べたい。

①主体的・対話的で深い学び

ゲストティーチャーとして他教科の先生を招くだけでも授業の雰囲気に変化が見られる。他教科の先生が英語を話す場面を設定するとそれが一つの **Role-model** となり、生徒を主体的な態度へと誘う。生徒同士の対話からの学びはもちろんのこと、教師同士の対話からも深い学びが生まれる。

②気づき (noticing)

授業を通して、教師の説明や強調したことではなく、生徒自身が共通点や相違点に気づくケースが多かったように思う。それは、複数の教師により、言

語形式・意味内容・言語機能の結びつきが強化され、生徒の自発的な気づきに繋がったと言えそうだ。

5. 今後の英語教育への示唆

本稿では、言語習得の3要素の枠組みに沿って3つの教科横断型授業の実践例とその効用を述べてきた。まとめとして、今後の英語教育の展望を述べ、本稿の締めくくりとしたい。

新学習指導要領では、その理念を実現するために必要な方策として、「教育課程全体を通じた取組を通じて、教科横断的な視点から教育活動の改善を行っていくこと」としている。これからの時代に求められる生徒の資質・能力を育むためには、これまで行われてきた各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で相互の比較や分析、関連付けなどによって物事を多面的・多角的に捉える力を複数の教員が協働することによって行っていく必要がある。

参考文献

- 和泉伸一(2016). 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』. アルク選書.
- 今井むつみ(2020). 『英語独習法』. 岩波新書.
- 土屋進一(2018). 「英語の仮定法と古文の反実仮想による教科横断授業」 *CHART NETWORK* 86号 2018年9月, pp.11-13. 数研出版.
- 土屋進一(2021a). 「物理×英語の CLIL・教科横断型授業」授業実践記録. 啓林館. <https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/kou/english/jissen/202104/index.html> (2021年4月)
- 土屋進一(2021b). 「集合(set)の考え方をを用いた数学×英語の教科横断授業」授業実践記録. 啓林館. <https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/kou/english/jissen/202108/index.html> (2021年9月)

参考映像

- 土屋進一・片山 哲(2021a). 「教科横断型授業：英語×物理～“speed”と“velocity”の理解への「加速」～」Find! アクティブラーナー
- 土屋進一・杼原大貴(2021b). 「教科横断型授業：英語×数学～“set”で深める集合・部分集合～」Find! アクティブラーナー